

41年卒クラス会と熊野古道・奥駈け体験記

早崎 義信 (昭41)

卒業後40年目のクラス会が7月16日に大阪の「東急ホテル」で行われました。会員41名中22名が出席。卒業後初めて会う同級生もいて、一瞬「誰だったかな?」と思い出せないが、直ぐに昔の懐かしい顔が浮かんで学生時代にタイムスリップ。「元気なうちに残された人生を楽しもう。」と言う事で来年も日光で開催する事になりました。

クラス会終了後は京都の祇園祭などを見学に行くグループもいましたが、私は熊野的那智の滝を訪ねました。というのは昨年、四国八十八箇所を44日かけて歩いた事もあって、四国遍路のルーツが吉野・熊野地方の山伏の修験道にあり何か情報が得られるかもしれないとの思いからでした。

那智の滝にある青岸渡寺の宿坊に泊まった際、「奥駈け」を自ら実践しておられる高木副住職にお会いし「熊野修験・秋峰入り計画書」と簡単な説明をして頂きました。

(熊野大峰奥駈修行は、今からおよそ1300年前「役行者」が開いたもので、修験道における最高修行である。山中を歩いて雑念を払い、山の靈気に打たれて心身の修練を積むものである。奥駈道が昨年7月に世界遺産に登録された。)

自宅の大村に帰ってから「熊野修験の森：宇江敏勝著」の奥駈け体験記を読み、険しい山道を自分の体力・脚力で歩き通せるか若干の不安はありましたが、クラス会で増井君から「早崎はやるよ。」と煽られながらボンと背中を押された事もあり、挑戦してみることにしました。それから毎日のジョギングを日課として準備しました。

9月9日。集合場所は奈良県十津川村。参加者は約70名。山伏姿の副住職が「修行の一環であることを忘れず、事故がないように完歩してください。」と挨拶のあと、10人位の山伏が吹くホラ貝を合図に一般参加者も出発。途中「塵チリ」と言われる神聖な場所では勤行が行われ、副住職が腰を沈めて腕を大きく回しながら気合を発して九字を切る。「臨リン！兵ヒョウ！闘トウ！者シャ！皆カイ！陣ジン！列レツ！在ザイ！前ゼン！」。それから全員で般若心経などを唱えてホラ貝で締めくり先へ進む。隊列が整う場所では点呼があり人数を確認。険しい上り坂になると山伏の先達の「六根清浄ろくこんしょうじょう」の掛け声にあわせて他の者は「懺悔ざんげ、懺悔ざんげ」の大合唱。山小屋で泊まる。

9月10日。早朝、ご来光を拝んだ後、副住職の僧侶らしい説法のあと出発。雲海が見え、眺めが



増井 松本 沖川 安田 藤沢 平山 伊豫屋 早崎 大坪 小松 中村 小野
原田 渡邊 織田 貝島 井田 池淵 山下 河本 太田 黒田

良い。途中、女人禁制を前にして女性群は山を降りる。泊まりは桜本坊。狭い風呂で2日分の汗を流す。

9月11日。雲海の上に朝日で浮かび上がった富士山の姿にしばし見とれる。「西の靨」では私も「捨身の行」を体験する。肩から胴体にかけて太い綱をかけられ頭のほうから断崖絶壁に差し込まれる。「親に孝行するか」「奥さんを大事にするか」と詰問され、「はい」と答えざるを得ない。終点の吉野

市街に近づく頃は足の痛みは限界に近いが「無言の行」をしながら何とかこらえて金峰山修験の総本山蔵王堂に無事に着く。

修験者の言葉に「山の修行より、里の修行」と言う言葉があるそうだ。今回、このように日常生活では味わえない貴重な経験をしましたが、家に帰ってからの日頃の行いが大切ということでしょう。

イタリア・シチリア島パレルモでの国際学会に参加して

富永 義則（昭44）

今回の第21回国際複素環化学会議はシチリア洲パレルモ市サン・パウロ・パレスホテルでパレルモ大学レミーレ教授実行委員長のもとで開催された。まずパレルモ市の事から紹介しておこう。

シチリア島パレルモ市

パレルモ市はシチリア島の中心都市で、フィレンツェを10コ集めた価値ある町といわれ、ゲートも「世界で最も美しいイスラムの都市」と讃えている、そんな町がパレルモです。シチリア島は長靴のつま先に位置し、地中海で最も大きな島です。日本人にはエトナ火山（3340m）が知られている。映画ゴッドファーザーの舞台でもありマフィアの町としての方がよく知られているかも知れない。事実13年前マフィア裁判で担当の検事が橋ごとと爆破され命を落としている。パレルモ空港の近くにあるその現場には、その事件を忘れないようにと茶色の記念のモニュメントが建っている。他にもある。マフィアの醜さが消えるまで茶色のモニュメントのままだという。地中海の要衝であったため、様々な民族の支配を受けてきたこの島には、ギリシャ、ローマ、ビザンチン、アラブ、ノルマン、ドイツ、フランス、スペインなどの文化的影響を受けた遺跡があちこちに見られる。それらがシチリア島全体に、またパレルモ市等の都市に混然としている。

パレルモ空港には7月30日の現地時間で22時頃着いた。ホテルに着いたのは翌日31日になってい

たのではないだろうか。31日は夕方の学会参加の受付と前夜祭まで自由時間となっている。一日の市内観光に出かける事にした。ホテルから町の中心まではバスを利用した方が便利と聞き、バスで行く事にした。バスのチケットは普通たばこ販売店で売っている。オーストリアのウィーンでもそうだった事が思い出された。バスで10分ぐらいで町の南側にあるパレルモの中央駅に着いた。ここからどの方向に行くか迷ってしまう。先ず「4つの辻」を意味するクアットロ・カンテイ、ここはマクエダ通りとエマヌエーレ通りの交差する角で、交差する4つ角のそれぞれの建物はそれぞれが向き合った形で、それぞれの面はスペイン・バロック様式の彫刻で飾られている。これらのビルや彫刻は古く黒ずんでいるためその芸術性がピンとこない。いたるところに彫刻が見られる。近くに16世紀のトスカーナの彫刻家によって造られた豪華な噴水と30近くの彫像からなるプレトリア広場がある。彫像がヌードであるため「恥じの広場」ともいわれているらしいが、この方が先のクアットロ・カンテイの彫刻よりも心に響く。

パレルモ市は人口66万人位だと聞いた。町は雑然とし、道は狭く、埃っぽい、道路の両端には所狭しと車が駐車している。それぞれ個人が駐車場の許可を必要とせず、路上駐車が認められているためや長い歴史のために道路が狭い。路上駐車のためさらに狭くなっている。しかし車は多い。バス等の公共の車は通路が確保されているが、普通

の車は一方通行になっている。路上のそれぞれの駐車間隔は狭く日本での縦列駐車が出来るような間隔ではない。どのようにして駐車するのか、案内人に聞いたところ、前の車を前のバンパーで押し、後ろは後ろのバンパーで押して場所を確保するらしい。出る時も同じでそれぞれバンパーで押して出られるようにスペースを確保する。この事を観光バスで経験する事になった。ある町に観光バスで行って、駐車場から出る時横の車が邪魔になって出られない。何回かハンドルでの切り返しをしてバスを斜にして、出ようとしてバックした時、ゴツンと車に当たった。あっ、事故だと思った。しかし、バスはそのままバックし続け、その乗用車を段差のある歩道に押し上げてしまった。それで悠々と駐車場を後にした。乗客から拍手が沸き起こる。相当傷が付いたと思って後でバスを確認してみたが、バスの後ろのバンパーには乗用車の赤色の塗料が一部付着しているだけであった。また、車は町中をかなりのスピードで走る。バスのスピードも凄い。事故が起きても当然のような気がする。パレルモの市街を出る時も乗用車とクラッシュ、それでも10分くらいの話し合いで済んでしまう。

町の中心は、アラブ人が造り、ノルマン人が手を加えたノルマン宮殿や12世紀末建築のシチリア・ノルマン様式の大きな教会カテドラーレを中心に歴史的遺跡が混然としている。パレルモ駅を中心に2〜3km²の範囲に中世時代の建物から現代的ビルディングまでそこにある。古い遺跡は今でも貴族が生活の場としているらしい。外からはとても貴族が住んでいる雰囲気は感じられないが、中はそれなりの調度品を備えた生活が営まれているという。一方裏通りには石造りの、半分壊れたような建物があり、そこに洗濯物が干してあり、生活の匂いがする。全体的にウィーンのようなリズムは感じられないが、それなりに古さと新しさが調和しているような気にもなる。このような町も夜にはそれぞれの通りが色鮮やかなイルミネーションのアーケードとなる。神戸のルミナリエの原形がここにある。これが1年中続いている。

町には観光案内の馬車がある。思い出の一つにと馬車に乗る事にした。そこには3台の馬車があった。最初40ユーロだというので高いと思い、

止める事にした。するとどうだろう。35ユーロで良いという。それも断り歩いて観光する事にした。歩き出して暫くすると後ろから馬車ごと追っかけてくる。そして25ユーロにするから乗らないかという。そんなに悪い感じもしなかったのでノルマン宮殿まで1.5km乗車、乗り心地はそれなりに快適であった。なにせ石造りの家とビルに挟まれた狭い路地とこの炎天下の気温は35〜36°C位ある。あいにくこの日、宮殿は閉館中で中を見る事はできず、一回りして簡単に観光は終わってしまった。観光案内書によると近くにノミ市場があるらしいのでそこまで行ってもらった。しかし店はどこも閉じたまま。それに乗車賃30ユーロ追加要求されてしまい、色々言っても英語は通じない。これくらいはサービスの内と勝手に思い込んだのが間違いでそんなに甘くはない。根負けして支払い、さらにそこから元の場所まで歩いて戻る事になってしまった。

近くには2ヶ所のオペラハウスがある。そのうち1ヶ所は会議のオープニングセレモニーが開かれる所で、夕方はここに来る事になっている。それまで未だ時間があるので美術館に行く事にした。観光案内の地図を頼りにいくら捜しても見つからない。たまたま通りかかった人が英語を話せる人で、やっと見つけることができた。その近くまでは何回か来ていたが、路地の中に入り込む事ができずにいた。途中案内の看板やポスターらしきものは全くない。まわりは古い石造りかレンガ造りの建物で美術館も古い石造りの城（アバテッリス宮殿、15世紀）がそのまま利用されているらしい。展示品はヨーロッパの美術館がそうであるように、キリスト教を中心とする宗教画が中心で、その中で印象に残ったのが青色の鮮やかな色で描かれたそれほど大きくないアントネッロ・ダ・メッシーナのキリスト「受胎告知」の絵であった。

シチリア島には2つの空港、それに鉄道が整備され、ミラノやローマ等の大都市からはこれらを利用するのが良さそう。また船も利用できるこの事。観光には、高速道路が島全体に整備されているためバスがよい。また市の中心部への交通機関はやはりバスで、バスの切符はウィーンと同じでタバコ屋に1.5ユーロで売ってある。1時間内であればこの1枚の切符で乗り降り自由で、しかもど

こで乗ってもよい。見たところだれも時間のスタンプを押していないし、だれも切符を運転手に見せている様子もない。時々チェックが入るらしい。

塩田の町トラパーニと天空の町エリチェ

パレルモでの2日目、シチリア島の北西部に位置するトラパーニに行く事になった。シチリア州都パレルモ市のサン・パレルモ・プレスホテルから2時間近くバスに乗っていくと、昔ながらの天日による製塩が行われているトラパーニに着いた。パレルモから高速道路利用で空港と岩山の間を通り抜けて島の西の端まで行く。途中山の麓には街の中とはちょっと違う一戸建ての家が並んでいる。それぞれ個人の別荘らしい。今は夏、家族はこの別荘で過ごし、御主人だけが街で働き、週末に戻る生活が一般的だ、とガイドの説明だった。海岸線を通り過ぎ島の内陸部へ入ると、見渡す限り白ワインの原料のブドウの畑が一面に広がる。ここだけを見ていると、とても島の中とは思えない。ハンガリーの大平原を思わせる。よく見ると背丈程の青々としたブドウの木には実がなっている。この島は非常に雨が少なく、特に7月、8月はほとんど降らない乾燥地帯らしい。この乾燥の中、ブドウの木も他の木々も緑鮮やかなのが不思議な感じがする。山々は高くなればなる程岩山と化している。ローマ帝国の穀倉地帯の歴史から、開発され続け砂漠化していったとも言われている。今でも、イタリアの重要な穀倉地帯になっている事に違いはない。質の良いスパゲッティやパスタの原料の小麦はここで生産されている。

今日(8月6日)のトラパーニは34~35°Cの真夏日ではあるが、霞が掛かったようでカラッとした青空ではない。遠くの景色がハッキリしないのが残念であった。2時間位で塩田が見えてきたが、それほど大きい感じはしない。塩田には塩水が満ち満ちている。しかし透明の澄み切った塩水ではない。塩田に近づくと、イメージしていた白砂とは違い土色、それに空き缶やオモチャが投げ込まれている。塩水も何か濁っている気がする。塩水を舐めてみても、そんなに塩からい感じはしなかった。また一部結晶化している塩を取って舐めてみても舌にピリピリする塩辛さはなく、柔らかいというか、甘くさえも感じられる。あちこちに

高さ2~3mで、雨水で溶けないように瓦で被われた塩の小山がある。一部には剥き出しになっている塩山も所々にある。しかし一部は白い小山ではない。なにかピンク色にみえる。これは真新しい塩山のため残っている微生物の色で、時間が経つにつれて白くなっていくそうだ。この濃縮された塩水に微生物が生きているのが不思議である。塩田にはあちこち風車がある。石の台だけで風車がない所もある。もちろんこの風車で風を送りより速く乾燥させるためである。しかし昔程盛んでなく廃業に追い込まれた塩田もあるという。それは石の台だけの風車跡として残っている。このような製法で塩が造られているのが不思議ではあるが、ここに来てみるとそういう雰囲気ではなく、ごく自然のようだ。

ここから2~3km北西部に750m位の高さの岩山があり、その頂上にエリチョという中世から続いている人口3000人の町があるという。そこに行く事になった。バスで曲がりくねった道路を30分かけて上っていったところに駐車所がある。ここまでくるとそれなりの広さがあり、小さな森もある。この駐車所から上の方が町になっている。岩山の頂上に人が住んでいること自体が不思議なのに、一つの町があることに驚きである。ギリシャ時代からローマ時代を経て中世に現在の町となるエリチェができた、案内者から説明をうけた。城壁の門にはスペインのハプスブルグ家の鷲の紋章がある。一時は牢獄として利用された事もあるという。今の真夏日からは想像できないが、冬になると囚人は凍死していく程寒い過酷な環境となるそうだ。この城の中に入っていくとそこから地中海が一望できる。この日は先ほども触れたように霞が掛かっているようで、遠くまでは見通しが効かないが、山の麓、海岸線、それに下のぶどう畑の眺めは素晴らしい。もとは女神の山と言われたそうで、そのいわれは知らないが何となく分かるような気もする。さぞここからの朝日、夕日は絶品だろう。

この山頂の町の建物はほとんど中世のままで、今もそこで生活が営まれている。今の収入こそ観光だろうが、昔は生活を何に頼っていたのだろう。町の石畳は時代を思わせる。ドイツやスペインでみた石の板でなく、自然石を縦に埋め込んだ方式

になっている。一個の石の幅はそれほど大きくなり、石の表面は磨かれたようにつるつるして滑りやすく歩きにくい。昼近くになると町の中央の小さな広場にはどこからとなく人が湧いてきて観光客で一杯になる。この広場のレストランで軽い昼食を済ませお土産店を廻って歩いた。ドイツのロマンス街道にある城壁の町を思い起こさせるような町並みであった。シチリア島に来て良かったと思う場所の一つになった。

セリヌンテのギリシャ神殿

古代ギリシャの神殿跡で有名なアグリジェントとは別に、アグリジェントの西部、テルモアの南に位置するセリヌンテにも巨大な神殿跡と古代都市の遺跡がある。紀元前8世紀頃からシチリア島沿岸にギリシャの植民地の都市が建設され、その時代の神殿や都市跡がある。アグリジェントにはギリシャのパルテノン神殿に次いで完全な神殿が保存されていると言う。

パレルモからバスで2時間くらい南に行くとセリヌンテに着いた。ここも観光客で一杯であった。遺跡のまわりは小高い土の土手で囲まれている。その中に入ると、500m位前方に予期もしなかった、これまで写真で見ただけで実物は見た事がない、あのギリシャのパルテノン神殿を思わせる巨大な神殿が見えた。何も考える事はない、自然に足はその方向へと急ぐ。ただ凄いと思っただけであった。

第21回国際複素環化学会議

この会議に最初に参加したのが1973年、仙台の故亀谷哲治教授が実行委員長となって開催された



第3回大会であった。それ以来30年以上、この学会に関与し、できる限り参加するようにしている。今回はヨーロッパ観光の目玉でもあるイタリア、シチリア島での開催であるため多くの参加が期待された。しかし前々回のウイーンでの開催に比べて国際的な参加国の広がりを感じられるが、日本からの参加は50人前後と非常に少なく思われた。日本の研究者の研究レベルは非常に高いと思われるが、日本独特の研究が少ないと思ったのは私だけであろうか。科学のグローバル化が進んでいるためであろうか、何か特徴がない。かつてはN-オキシド、ピリミジン、ピリダジン、インドール、キノリン、イソキノリン、インドリジン等々日本が指導的役割を果たしてきた化学があったが、現在日本の特徴となる複素環化合物がないのが気になる。ピリミジンならだれだれ、インドールならだれ、という具合にそれぞれの複素環化学にはそれぞれ中心となる研究者がいた。

現在程、化合物の持っている潜在的な様々の機能性が注目されている時はない。それぞれの複素環化合物にはそれぞれ異なった性質があり、様々の機能性を秘めている。それ故複素環化学はあらゆる分野で、特に電子材料分野で基礎化学から応用分野まで、幅広く研究されている。またこれまでは、アメリカ、ヨーロッパ、それに日本がこれら研究の中心であったが、現在では韓国、台湾、中国、インド、エジプト等のアフリカ諸国、それに東ヨーロッパ諸国へと、その研究地域は世界中に広がりを見せている。それを実感できたのが今回のイタリアでの第21回大会であった。次回は2007年7月オーストラリア・シドニー市での開催の予定です。

